

## 長く維持してきた れんこんのトップ産地 ～石灰窒素の動力散布で「黒皮症」「袖肌症」を防除～ 新潟県長岡市大口 田辺良太さん

### ●減反に対応してれんこんの作付拡大

「石灰窒素だよりNo.141」(平成18年6月発行)配付時のアンケート葉書に回答いただいた新潟県長岡市大口(旧中之島町)のれんこん栽培篤農家の田辺良太さんを11月末に訪ねた。大口地区は、信濃川水系の豊かな地下水を利用した新潟県内最大のれんこん産地である。田辺さんは、国の減反政策にともない昭和46年から、これまでも栽培していたれんこんの作付面積を大幅に拡大し、現在はご夫婦で2ha、ほかに種ハス用として25a、および水稻を3.5ha作付けしている。

### ●労力過重で一度は散布を断念したが

栽培面積拡大後の5～6年間は、粉状石灰窒素を10a当たり80kg使用していたが、散布作業に大変な労力が必要なため使用を断念した。しかし、10年ほど前からイマムラネモグリセンチュウによる通称「黒皮症」や「袖肌症」の障害が発生したため、農業登録の関係上5～6年前から粒状石灰窒素を定植前に10a当たり60～80kg動力散布機で施用している。

田辺さんによると「石灰窒素を使用しても、センチュウを完全に駆除することはむずかしいが、被害が進行していないので、効果があると考えている」とのことであった。

### ●2000kgを超える早生種の反収

栽培体系は、在来種を中心に、早生種(エノモト)を1/3作付けし、3月上旬に石灰窒素を散布、3月下旬～4月上旬に基肥施用とともに定植(200本/10a)をおこない、途中追肥を2回とアブラムシの駆除を実施し、8月～11月末に収穫となる。

10a当たりの収量は、早生種が2,000～2,200kg、在来種が1,700～2,000kgである。

### ●収穫は腰まで水に入る重労働であるが

収穫は大変な重労働であり、腰まで水に入り、圧水の吐出するホースで掘り起こし、両手で1本ずつ丁寧に取り出し、その後自宅へ持ち帰って洗浄と選別をおこない、箱詰め出荷となる。

銘柄米の産地である新潟県でも、米価は低迷しているため「れんこん栽培は重労働ではあるが、稲に比べ反収が上回るのでもつづける」とのことであった。

### ●組合で産地全体のレベルアップを図る

同地区の大口れんこん生産組合は、非常にまとまりがよく全員が品質向上のための情報を交換して全体のレベルアップを図っており、長くトップ産地を形成維持していることもうなづけた。

近くには郷土が生んだ政治家、大竹貫一の生家である大竹邸記念館があり、貫一の銅像が建立されている庭園は「新潟県景勝百選」に選ばれ春には見事な桜が咲き揃うので、次回は3月から4月にかけての再訪を考えつつ現地を後にした。



田辺良太さん



自宅での選別作業